

# 養育環境が幼児の社会性の発達に 及ぼす影響について

木村留美子 竹俣由美子\* 津田 朗子  
藤田 三樹\* 木村 礼 関 秀俊

## 要 旨

子どもたちに起こっている「むかつく」、「きれる」といった怒りを伴った衝動的行動や、不登校等の引きこもり行動は子どもの社会性の発達と深く関連している。しかし、このような行動は突然現れるのではなく、すでに乳幼児期からの人との関係性のなかで形作られている。

そこで、本研究では幼児の養育環境が社会性の発達に及ぼす影響を検討するために、社会性の発達が測定可能な5歳児200名を対象に調査を行った。調査への回答は保護者と保育園の担任保育士に依頼した。その結果、養育態度が良好な母親の子どもは「注意散漫」「孤立傾向」「内向性」因子の得点が低く、「対人関係」因子の得点が高かった。子どもの数では、ひとりっ子よりも、2人以上の子どもの方が「協調性」因子の得点が有意に高かった。通園歴は長い群が「対人関係」「協調性」因子の得点が高かった。また、十分なロコモーションを体験している方が、「自己コントロール」「対人関係」「協調性」「社会性」因子の得点が高く、「注意散漫」因子の得点が低かった。

## KEY WORDS

Nursery school children, Sociality, Raising environment

### はじめに

今日の子どもたちにみられる社会的行動の問題点は、「むかつく」、「きれる」といった言葉に代表される衝動的な反社会行動と不登校や引きこもりといった円滑な対人関係を保つことの困難な非社会的行動とに分かれる<sup>1)</sup>。このような、子どもたちにみられる行動は、社会性の未発達によるものであり、生育歴の中で子どもが親との関わりを通して対人関係の基礎を獲得してこなかったことも原因の一つと考えられる。また、その後の対人関係のなかで、大人の反応が子どもの発達に適切な対応でない場合にもこのような行動が現れる。つまり、「問題行動」は子どもからのサインであったり、発達の歪みの現象として表れたものといえる<sup>2)</sup>。古くはギリシャの時代より、人間は社会的な動物であるといわれ、その人間認識は基本的には変わることなく今日まで受け継がれてきている。また、社会は個人間の人的相互作用

により成立しているという社会の特性<sup>3)</sup>を考へても子どもが社会性を発達させていくことは、社会の中でひとりの人間として存在する上で重要なことである。このような社会性の発達については、とりわけ幼少時における主たる養育者と子どもとの相互関係の成立が基盤であり、幼少期の愛着の形成<sup>4)</sup>が重要である。幼少期に親と子の安定した関係が形成されることで子どもは親と子の特定の関係を離れても様々な場面で自己の情動を制御し、対人行動をコントロールする機能を持つと考えられている<sup>5)</sup>。さらに、生後6ヶ月ころからみられる、ロコモーション(ハイハイに代表されるリズム運動)は脳内のセロトニン神経系を活性化し、攻撃的回路を抑制するとの報告<sup>6)</sup>もある。また、ハイハイが始まると、自分の力で他者に近づく行為が可能になることから、周囲に対する興味が喚起され、さらに周囲の反応により子どもを取り巻く環境は一層豊かになる。しかしなか

金沢大学医学部保健学科

\* 金沢大学大学院医学系研究科保健学専攻

ら、近年、ロコモーションに変化が起きていることも報告され<sup>7)</sup>ており、運動能力への影響や社会性の発達への影響が懸念される。また、親と子の相互作用の質は子どもの言語発達にも影響<sup>8)</sup>を及ぼし、また母親の不安感や養育態度や子ども観にも影響<sup>9)</sup>し、不登校児を持つ母親の養育態度については、不登校児の母親の自己像はそうでない母親に比べて否定的であるとの報告もある<sup>10)</sup>。このように、子どもの発達と親の養育態度との間には強い関連があり、これを基盤にして子どもは他者と共存する社会的存在として徐々に変化する。社会性の大きな変化の時期は3歳から6歳の間が最も重要な時期である<sup>11)</sup>が、このような社会性の発達は運動や感覚機能の発達とも深い関連があり<sup>12)</sup>、この時期の発達をいかに保障するかが大人の重要な役割である。

そこで、本研究では、社会性の発達の基礎が完了する幼児期の社会性について、日常的な生活場面から評価した研究が少ない中、子どもの養育環境に対する提言を行うことを目的に、保育園で観察される幼児の社会性と養育環境との関連性を調査したので報告する。

## 対象と方法

### 1. 対象

保育園と保護者に対し研究の主旨を説明した上で、保護者の同意が得られた金沢市内の6カ所の保育園に通園する平均年齢5歳の幼児200名である。5歳児は社会性が獲得され、これを測定することが可能な年齢である。

### 2. 調査

調査期間は、平成14年7月23日～10月20日である。

1) 保護者による調査は、子どもの年齢・性別・同胞の数・保育園入園期間(保育歴)・ハイハイの期間、子どもと家族関係である。

2) 子どもの社会性

子どもの社会性については幼児用社会的スキル評定尺度 教師評定用 (social skill rating scale: SSRS) を活用し、クラス担任の保育士に依頼した。SSRSは40項目の質問から構成されており“まったくみられない”から“非常によくみられる”の5段階評定で回答を求めた。

3) 養育態度について

養育態度については、子どもの主たる養育者である母親と接触の機会が多い担任保育士に他者評定を依頼した。評価の内容は、日頃の子どもの対する親の対応から“子どもの訴えに耳を傾ける”、“子ども

が理解できるようなことばかけをしている”、“衣・食・清潔に対する世話をしている”、“持ち物を忘れないように必要な日には持たせることができる”といった項目について総合的な評価を“たいへん悪い”から“たいへん良い”の5段階評定によってクラス担任の保育士が評価した。得点の高いほうが養育態度は良好である。

4) ロコモーションについて

ロコモーションについては、0歳から1歳の時期にかけてみられた「ハイハイ」について、母子手帳等を参考にその期間を確認し記入を依頼した。ハイハイの期間が断続的にはあっても、3ヶ月ほど継続して見られた場合には対象児に十分なロコモーション期間があったと判断した。

## 3. 分析方法

統計的解析にはコンピュータソフト SPSS for Windows Ver. 10.0を使用し、因子分析は主因子法により、割合比較には $\chi^2$ 検定を、得点比較には対応のないt-testを、群間比較には分散分析を行った。

## 結 果

### 1. SSRS による社会性

SSRSによって得られた子どもの社会性の項目については、その構成因子を確認するために主因子法により解析を行った。その結果、7因子が抽出された(表1)。7因子の因子寄与率は65.6%であった。第1因子は「自己コントロール」因子、第2因子は「注意散漫」因子、第3因子は「対人関係」因子、第4因子は「孤立傾向」因子、第5因子は「協調性」因子、第6因子は「社会性」因子、第7因子は「内向性」因子の7因子である。これらの因子のうち、社会的行動因子は第1因子の「自己コントロール」因子、第3因子の「対人関係」因子、第5因子の「協調性」因子、第6因子の「社会性」因子であった。また第2因子の「注意散漫」因子、第4因子の「孤立傾向」因子、第7因子の「内向性」因子は問題行動を示す因子であった。

### 2. 母親の養育態度と社会性

母親の養育態度の平均得点は3.8±1.1点であった。そこで、5点の71名を養育態度「良い」群、3～4点の101名を「中間」群、2点以下の28名を「悪い」群として因子の得点を比較した。「自己コントロール」因子では、養育態度「良い」群・「中間」群と「悪い」群との間に有意差を認め、親の養育態度が良好な群の「自己コントロール」得点が高かった( $p<0.001$ )。「社会性」因子では、親の養育態度

表1 幼児の社会性の因子分析

項目	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子	第6因子	第7因子	共通性
<b>第1因子 「自己コントロール」</b>								
批判されても、気分を害さないで気持ちよくそれを受ける	<b>0.783</b>	-0.059	0.039	0.143	-0.012	-0.293	-0.043	0.726
仲間から嫌なことを言われても、適切に対応する	<b>0.773</b>	-0.118	0.134	0.184	0.181	-0.172	-0.073	0.730
仲間と対立したときには、自分の考えを変えて折り合いをつける	<b>0.750</b>	-0.125	0.119	0.052	0.131	0.216	0.023	0.659
大人とのいざこざ場面で自分の気持ちをコントロールする	<b>0.659</b>	0.096	0.355	0.050	0.235	0.042	-0.028	0.629
かんしゃく持ちである	<b>0.656</b>	0.297	0.036	-0.180	0.231	0.028	-0.041	0.607
仲間とのいざこざ場面で自分の気持ちをコントロールする	<b>0.645</b>	-0.287	0.067	0.021	0.234	0.228	-0.183	0.644
ゲームなどの活動中に、自分の順番を待つことができる	<b>0.622</b>	-0.362	0.075	0.142	0.108	0.415	-0.101	0.738
教師の指示に従う	<b>0.486</b>	-0.345	0.187	-0.122	0.168	0.224	0.092	0.493
園にある遊具や教材を片付ける	<b>0.450</b>	-0.414	0.198	0.119	0.262	0.227	0.282	0.626
<b>第2因子 「注意散漫」</b>								
不注意である	0.033	<b>0.821</b>	0.004	-0.184	-0.079	0.044	-0.058	0.727
注意散漫である	-0.150	<b>0.815</b>	0.110	-0.177	-0.079	0.042	0.062	0.743
そわそわしたり、落ち着きがない(多動である)	-0.149	<b>0.779</b>	0.141	0.084	-0.130	0.113	0.146	0.707
他の子どもがしている活動や遊びのじゃまをする	-0.252	<b>0.653</b>	0.391	-0.128	0.070	-0.014	0.237	0.721
決まりや指示を守らない	-0.444	<b>0.576</b>	-0.086	-0.228	-0.060	0.072	-0.068	0.602
人や物に攻撃的である	-0.475	<b>0.526</b>	0.334	-0.148	0.140	0.066	0.103	0.670
自由時間の過ごし方が適切である	0.135	<b>-0.403</b>	0.291	0.267	0.446	0.292	-0.166	0.404
<b>第3因子 「対人関係」</b>								
不公平な扱いを受けたと感じたら、教師にそのことをうまく話す	0.194	0.105	<b>0.790</b>	0.163	0.280	-0.015	-0.068	0.783
友達をいろいろな活動に誘う	0.203	0.086	<b>0.705</b>	0.449	0.235	-0.038	0.093	0.812
自分から仲間との会話を仕掛ける	0.210	0.181	<b>0.693</b>	0.435	0.180	0.196	0.075	0.822
不公平なルールには適切なやり方で疑問を唱える	0.341	0.023	<b>0.678</b>	0.079	0.268	-0.110	-0.266	0.738
他の子どもと口論する	-0.228	0.429	<b>0.660</b>	-0.046	0.208	0.076	0.204	0.764
簡単に友達を作る	0.187	0.024	<b>0.532</b>	0.376	0.190	-0.013	0.116	0.510
<b>第4因子 「孤立傾向」</b>								
仲間との遊びに参加しない	-0.156	-0.051	-0.314	<b>-0.805</b>	-0.166	0.016	0.024	0.802
指示しなくても、遊びや活動の集団に加わる	0.084	-0.107	0.100	<b>0.801</b>	0.277	-0.094	0.179	0.788
ひとり遊びをする	0.033	0.239	-0.219	<b>-0.707</b>	-0.090	0.074	0.212	0.664
遊び仲間選ばれない	-0.175	0.225	0.136	<b>-0.705</b>	0.037	-0.184	0.203	0.674
ゲームや集団活動に参加する	0.153	-0.232	0.185	<b>0.625</b>	0.320	0.065	0.008	0.608
寂しそうにしている	0.006	0.181	-0.108	<b>-0.384</b>	0.039	0.283	0.107	0.285
<b>第5因子 「協調性」</b>								
人に自分から自己紹介をする(自分の名前を言う・教える)	-0.129	0.086	0.227	0.173	<b>0.696</b>	-0.204	-0.035	0.633
言われなくても教師の手伝いをする	0.175	-0.187	0.153	0.295	<b>0.622</b>	0.210	0.044	0.610
適切な場面で自分のよいところを言える	0.191	-0.066	0.345	-0.003	<b>0.522</b>	-0.079	-0.039	0.441
教室での活動に自分から進んで仲間の手伝いをする	0.351	-0.135	0.335	0.391	<b>0.455</b>	0.059	0.253	0.681
仲間からほめられたり、認められたりする	0.242	-0.120	0.314	0.267	<b>0.446</b>	0.292	-0.166	0.555
仲間をほめる	0.329	-0.032	0.280	0.250	<b>0.445</b>	0.160	-0.112	0.487
<b>第6因子 「社会性」</b>								
他の子どもたちと一緒にいるとき不安そうである	-0.065	0.304	-0.087	-0.065	-0.062	<b>0.860</b>	0.065	0.857
人とゲームをしているときに、ルールに従う	0.568	-0.191	0.361	-0.024	0.008	<b>0.516</b>	-0.124	0.772
園での活動をきちんと行う	0.444	-0.274	0.212	0.224	0.354	<b>0.407</b>	-0.079	0.664
<b>第7因子 「内向性」</b>								
仲間にいじわるをされても適切に対応する	0.380	-0.248	0.243	0.059	0.289	-0.003	<b>-0.548</b>	0.652
悲しそうであったり、ふさぎこんだりする	0.216	0.425	0.252	-0.242	0.002	0.238	<b>0.483</b>	0.640
仲間には好かれていない	-0.169	0.447	0.195	-0.317	0.049	-0.158	<b>0.411</b>	0.563
因子寄与	5.964	4.950	4.461	4.392	2.879	2.181	1.405	26.232
因子寄与率 (%)	14.910	12.376	11.153	10.980	7.196	5.453	3.512	65.581

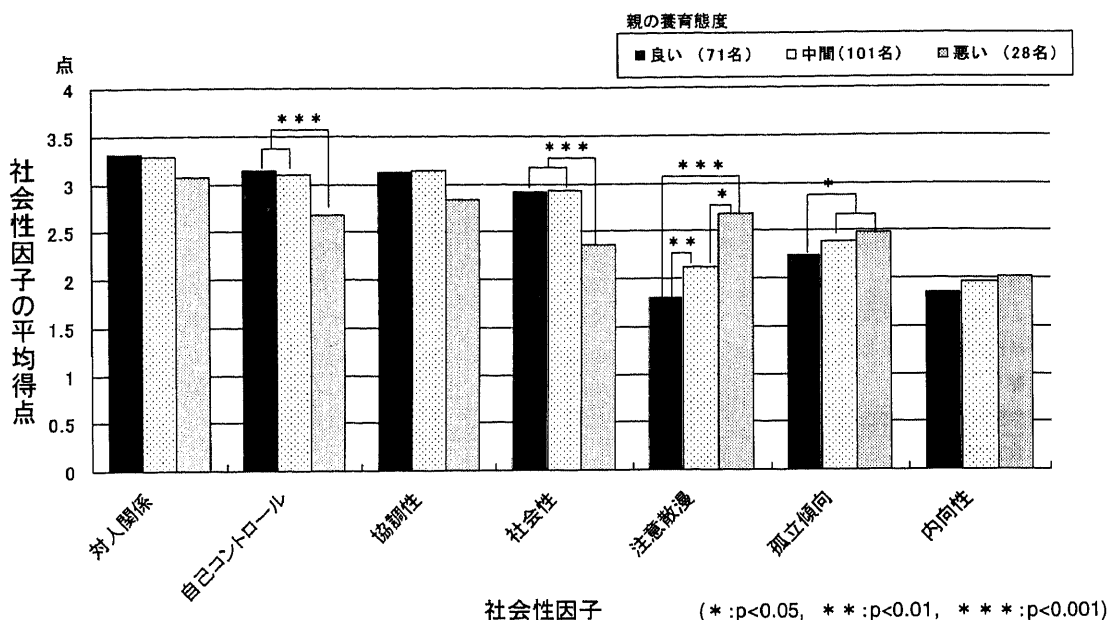


図1 親の養育態度と社会性因子

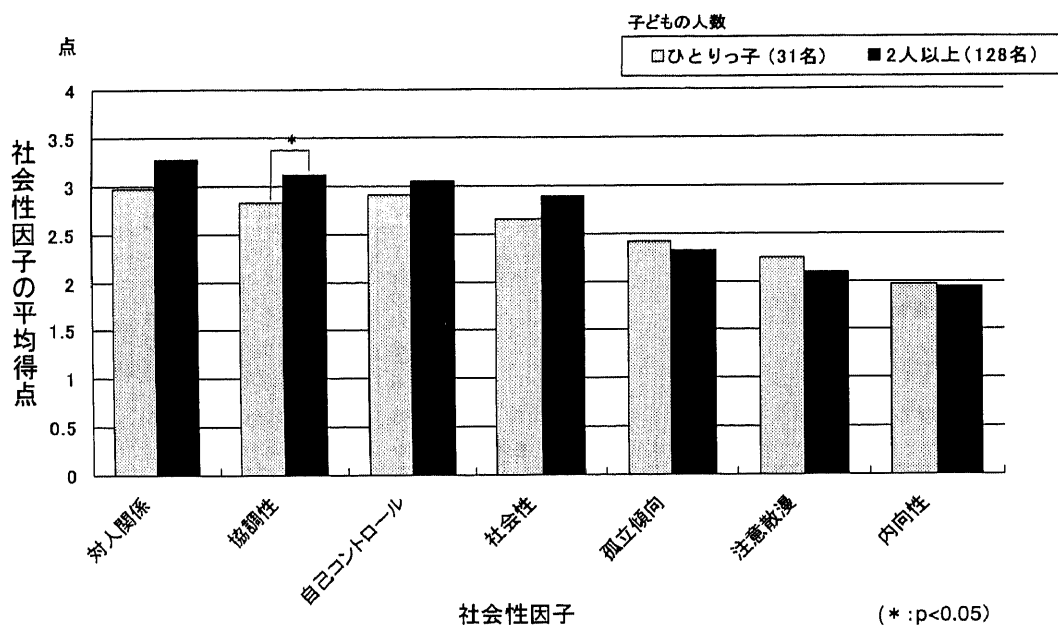


図2 子どもの数と社会性因子

「良い」群・「中間」群と「悪い」群の間に有意差を認め、親の養育態度が良好な群の「社会性」の得点が高かった ( $p < 0.001$ )。「注意散漫」因子では、親の養育態度「良い」群と「中間」群 ( $p < 0.01$ )、「中間」群と「悪い」群 ( $p < 0.05$ )、「良い」群と「悪い」群の間に有意差を認め ( $p < 0.001$ )、親の養育態度が悪くなるにつれて子どもの「注意散漫」傾向が高くなっていった。「孤立傾向」因子では「良い」群と「中間」群・「悪い」群の間に有意差を認め、養育

態度の悪い方に「孤立傾向」得点が高かった ( $p < 0.05$ ) (図1)。

### 3. 子どもの数と社会性

子どもの数に関しては、41名が無記入で、平均  $2.1 \pm 0.7$  人であった。そこで、ひとりっ子31名と2人以上の128名の2群に分類し因子の得点を比較した。その結果「協調性」因子に有意差がみられ、2人以上の同胞がいる群の方がひとりっ子よりも因子の得点が高かった ( $p < 0.05$ ) (図2)。

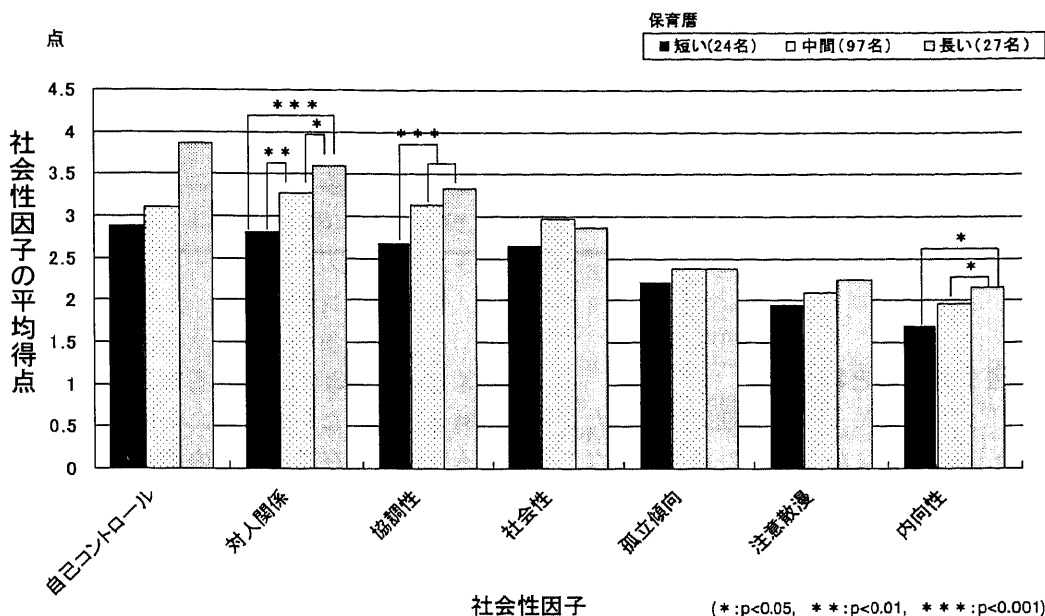


図3 幼児の保育歴と社会性因子

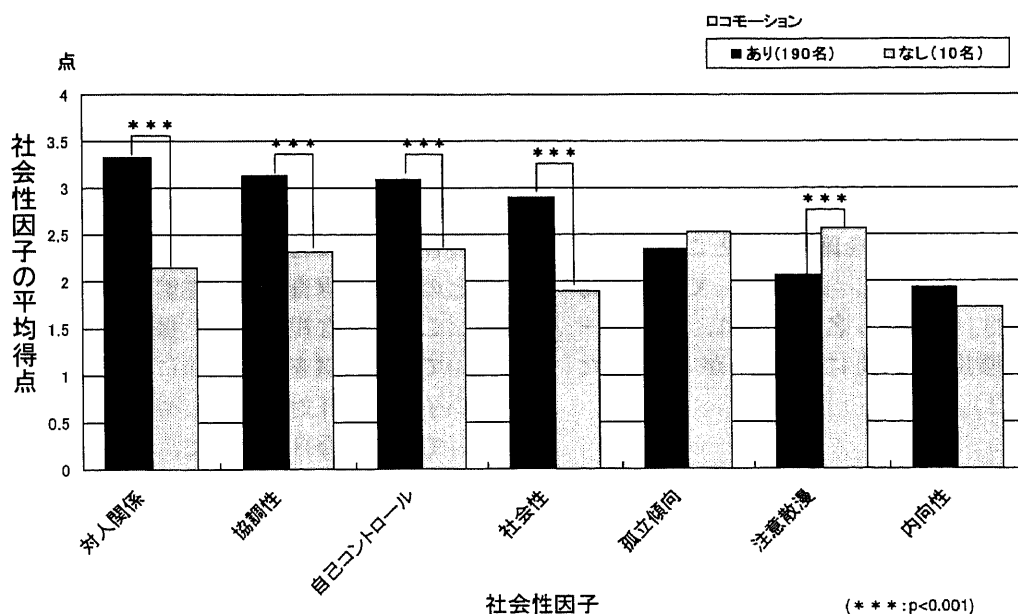


図4 ロコモーションの有無と社会性因子

#### 4. 保育歴と社会性

保育歴の平均月数は42.4±16.5ヶ月であった。そこで、27ヶ月（2年3ヶ月）以下の保育歴24名を「短い」群、28ヶ月（2年4ヶ月）以上58ヶ月（4年10ヶ月）以下97名を「中間」群、59ヶ月（4年11ヶ月）以上27名を「長い」群に分類し因子の得点を比較した。「対人関係」因子では「短い」群と「中間」群の間に有意差を認め（ $p < 0.01$ ）、「中間」群と「長い」群の間にも有意差を認め（ $p < 0.05$ ）、保

育歴が長くなるにつれ対人関係因子の得点が高くなっていった。「協調性」因子では、「短い」群と「中間」群・「長い」群との間に有意差を認め、保育歴が長い方が協調性の高いことが示された（ $p < 0.001$ ）。「内向性」因子は全体の得点は低いが、保育歴の「長い」群が最も「内向性」因子の得点が高く、保育歴「短い」群と「長い」群の間に有意差を認め（ $p < 0.05$ ）、「中間」群と「長い」群の間にも有意差を認めた（ $p < 0.05$ ）。

表2 幼児のロコモーションの有無と親の養育態度

ロコモーションあり	71 ( 100.0 )	96 ( 95.0 )	23 ( 82.1 )	. p<0.001
ロコモーションなし	0 ( 0.0 )	5 ( 5.0 )	5 ( 17.9 )	
合計	71 ( 100.0 )	101 ( 100.0 )	28 ( 100.0 )	

人数(%)

### 5. ロコモーションの有無と社会性

調査票から、十分なロコモーション期間があったもの190名を「有り」群、なかったもの10名を「なし」群として2群に分類したが、「なし」群の10名は「ハイハイ」を全く行ったことのない子どもであった。この2群について7因子の得点の比較を行った。「対人関係」、「協調性」、「自己コントロール」、「社会性」、「注意散漫」の5因子はロコモーションの有無との間に有意差を認め、社会的行動を示す4因子はロコモーション「有り」群の得点が高く、「注意散漫」因子はロコモーション「なし」群の得点が高かった ( $p<0.001$ ) (図4)。

### 6. ロコモーションの有無と母親の養育態度

200人の子どものうち、ロコモーション「なし」と判断された幼児は10名であったが母親の養育態度とロコモーションとの関係を確認したところ、養育態度「悪い」群にロコモーションを行っていない幼児が5名、「中間」群にも5名がみられ、ロコモーションと養育態度との間に有意差がみられた ( $p<0.001$ ) (表2)。

### 考 察

社会性の因子として7因子が抽出され、そのうち4因子が社会的行動因子、残る3因子が問題行動を表す因子として抽出された。そこで、これらの因子に基づいてそれぞれの調査項目との比較を行った。親の養育態度と子どもの社会性因子との間には有意差を認め、親の養育態度が良好な群は、特に子どもの「自己コントロール」や「社会性」の発達に影響を及ぼすことが明らかとなった。問題行動因子としての「注意散漫」「孤立傾向」では、親の養育態度が良好でない群の得点が高く、養育態度が良好でない養育者の子どもは集中力に欠け、自分自身を制御することが困難で、他者との関係も上手く取れず孤立しがちであることが明らかとなった。このような対人関係に問題を持つ傾向は1985年のNHK世論調査<sup>13)</sup>においてもすでにみられており、この時の調査

対象であった3600人の若者たちは深い人付き合いを求めない若者たちであり、その時の若者に代表される人たちが現在子育て中の親たちであることを考えれば、表面的な人間関係を好む親に育てられている現代の子どもたちの社会性の発達への影響も当然のことと考えられる。

また、少子化が進む中で、子どもの数は少なくなり、子どもの人数の平均は2人であったが、きょうだいの数が多い子どもの方が「協調性」に富んでいることが明らかとなった。現代の出生率を考えた場合、今後ひとりっ子が増加することは明らかであり、彼らに対して、他者との交渉の仕方や、他者と共存することの大切さを伝える社会性の育て方や、これらを体験できる機会を保障していくことの必要性が求められる。このような機会の保障という点では、社会性の発達にとって重要な時期に異年齢と関わることのできる保育園や幼稚園の担う役割は重要である。このような視点から、保育歴と社会性の関係については、本調査で明らかになったように保育歴が長い子の方が「対人関係」や「協調性」の得点が高くなっていった。今日のように、地域力の低下や親の育児能力の低下、少子化などが示す実態は、3歳までは家庭で育てるべきとの“3歳児神話”を肯定する状況にはもはやないのである。従って、今後のこれまでの考え方とは異なる視点から家庭や地域の養育力を高める支援の施策と共に保育園や児童館における保育の質の充実や、地域・社会・親を巻き込んだ幅広い視野に立った支援のあり方に期待がかかる。

また、ロコモーションはその手足の動きから、大脳前頭葉を刺激し、神経伝達物質であるセロトニンの分泌を促す<sup>6)</sup>。このことは、ドーパミンを抑制し穏やかな対人関係の形成を促すことへとつながるが、ロコモーションを積極的に行っている子どもの親は養育態度が良好であった。子どもが最初に身につける、自力で移動する「ハイハイ」の機会をさまざまな親の都合で歩行器を活用したり、ベビートッターに座らせたりすることはそのための体験の機会が減

少するだけではなく、子どもの社会性や物事に挑戦する意欲や能力など発達全般にわたって重要な影響を及ぼす。つまり、子どもの発達についての親の知識や理解のなさが子どもの発達の機会を奪うことになる。このことは、現代の子どもの遊びについても同様で、パソコンのゲームを介しての戦いごっこ、また電子メール、インターネットによる顔の見えない相手とのやりとりなど、生活時間に関係なく人との直接的な相互交渉を持たずに一方的な伝達だけで関係を成立させようとする機器の著しい普及はさらに人と人との関わりを少なくする。このような利便性のみを追求した社会の変化に適応していくことが人間にとって幸福な道ではないように思えるが、本調査の結果からは、子どもの育つ環境と社会性の発達には深い関連のあることが明らかになった。これらの結果を受け、われわれ大人は、もっと子どもの育つ環境についての関心を高めていく必要があることを痛感する。

#### 謝 辞

本研究に快くご協力頂きました、真行寺六美苑、泉の台幼稚舎、安原保育園、光保育園、石川県済生会保育園アイリス、龍雲寺保育園の保護者の皆様、および園長先生はじめ担当保育士の皆様方に心より感謝申し上げます。

本研究は、平成14年度三菱財団研究助成金の助成

を受けて実施した研究の一部である。

#### 文 献

- 1) 甘楽昌子：学童期の問題行動。日医雑誌，123：1439-1442，2000。
- 2) 小崎 武：(学童期の)問題行動—発生機起序と治療的アプローチ。母子保健情報，46：86-94，2002。
- 3) G・ジンメル：社会学の根本問題。社会思想社，1966。
- 4) ボウルヴィ・J：母子関係の理論 I 愛着行動。岩崎学術出版，1976。
- 5) 戸田弘二：Internal working models 研究の展望。北海道大学教育学部紀要，55：133-143，1991。
- 6) 神山潤：キレル子と睡眠—都教育研のアンケート結果を眺めて。チャイルドヘルスケア 3(8)：34-35，2000。
- 7) 正木健雄 他：我が国において実感されてきた子どものロコモーションの“おかしさ”「最近増えている」「いる」という回答率の推移。日本体育大学紀要，32(1)：35-56，2002。
- 8) 興石 薫：母子相互交渉の質と母親の育児不安及び子どもの言語発達。小児保健研究，61(4)：584-592，2002。
- 9) 藤本 昌樹 他：母親の不安と養育態度，子ども観に関する共分散構造モデル。小児保健研究，62(3)：359-369，2003。
- 10) 板橋 登子：不登校児をもつ母親の養育態度と自己像。カウンセリング研究，33(1)：8-17，2000。
- 11) ピアジェ・J：知能の誕生。ミネルヴァ書房，1978。
- 12) 神谷美恵子：こころの旅。みすず書房，1982。
- 13) NHK 世論調査部編：日本の若者。日本放送出版協会，1986。

## **The effect of the raising environment on the development of the infant sociality**

Kimura Rumiko, Takemata Yumiko, Tsuda Akiko  
Fujita Miki, Kimura Aya, Seki Hidetoshi

### ABSTRACT

It is deeply related to the development of the sociality of child that impulsive behavior which accompanied the anger of "mukatsuku", "kireru" and the school refusal, which he (or she) shuts himself from others, are observed to the children.

However, these behaviors don't appear suddenly and have already been formed in the human relation since the infancy.

Therefore, it was examined the effect of the raising environment which affects the development of the infant sociality in this study. This investigation was performed for 200 children of 5-year-old who could measure the development of the sociality and respondents were their parents and classroom teachers in the nursery school.

As the result, the child of the parent whose raising attitude was good showed strong tendency for factor "personal relationship", and weak tendency for factor "dispersion", "isolation" and "introversion". In the number of sibling, case of over 2 children showed particularly strong tendency for factor "cooperation" compared with case of one-man.

The children who go to nursery school long period showed strong tendency for factor "personal relationship" and "cooperation". The children who experienced sufficient locomotion showed strong tendency for factor "self control", "personal control" and "cooperation", and weak tendency for factor "dispersion".